

果たして之に伴ふの準備をなしつゝあるか、日夜營々唯だ學問の爲めに追はれ身は過去の責に償ひ、現在の務めを盡くするに念にして、何等將來に對する準備もなく後より來たるものに續々追ひ越され、獨り人世の落伍者となつて甘んじ得るか、「これではならぬ」「どうかせねばならぬ」と感得したるものは、自己の現在の境遇より進み出すの微光を認めためたもので、この微光を辿りてこそ吾々は向上の大道に進む事が出来るのである、此の思想なき者は全く黒闇裏に没在して、何等發展の素地をも修ふ能はざるものである。

人類の進歩は「これではならぬ」に萌し社會の發展は「どうかせねばならぬ」に基き、吾等の向上も「これではならぬ」「どうかせねばならぬ」を外にして得らるべきものではない、「これではならぬ」と現在の缺陷を看破し「どうかせねばならぬ」と理想の實現を欲求し、「これではならぬ」が故に反省し「どうかせねばならぬ」と努力奮發し、此反省によつて缺陷填補の策は立ち努力によつて理想實現の計はなるものである。



夏の宵

本村 弘

机に向つたが蚊の攻撃が激しいのでとても家には居られない、團扇片手に前に散歩に出ると鏡の様に透き徹つた空には、何時しか盆の様な月は、雑木林上に登つて無数の星は金砂子を散したやうに、瞬く如く煌いてゐる。

翠緑滴る木の葉は其の光に映發して銀色になつて晝かど欺かれる様である……、邊は寂寞として山門の大鼓の音のみ手に取る様に聞える、谷底の庵の煙は靜かにのぼり鬱蒼としてゐる、森の中に或は高く或は低く

建てる裏門・我等の學院・教頭寮等を背景に、躍るが如き松の潔く夜景を飾りたる有様はまるで油繪の様である。

淡墨もて描いた様なる遠山の彼方に、幽に見えたる白雲は長く／＼長蛇の如くなつては、蜿蜒迂曲して次第／＼に山を取巻き谷を埋め、見る間に雲海を生じ覺林坊の燈も灰色につゝまれた。

池の鯉は逃げ去り星墜ちて水面緋の如く堂前の燈籠は、折しも一しきりの風に嬉しさうに搖れて動く……。



秋の歡喜

高橋是明

故人は秋を悲しいものゝ様に謂つて來ました。が、自分は最も秋を喜ぶのです。月の光、虫の音、秋の寂しさの中に温味を包んでゐます。哀れなるが中に楽しさが含れてゐます。決して悲觀すべきものではないと思ひ、且信じて居るのです。蕭條とか、寂寞とか好んで陰氣な文字を使つて、秋を寂しい様に謂ひ、悲しいものゝ様に嘆ずるのは陳腐です。又月並です。

天は高く氣は澄む、今迄の暑さに蕩けた身體も、金風一度肌膚を吹くと、肉が緊つて來ます。骨が硬くなつて來ます。そして、其處に新しい血が潮のやうに湧いて來るのです。青春の氣が身體中に充ち溢れて、泰山崩れよ、北海荒れよ、物の數かは、我に戰ふべき準備と力と、武器とがある、いざ、一番と腕を叩いて躍り出したくなりませぬ。

秋の自然程自分を樂しませるものは、ありません。山の姿や、端麗、水之流れや、清澄、野には可憐の小